様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成　21 年　4 月　30 日現在

研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2007～2008
課題番号：19520259
研究課題名（和文）　『ローラン伝説』の成熟－フランスからスペインへ

研究課題名（英文）　The Legend of Roland in Spain.

研究代表者
福井　千春　(FUKUI CHIHARU)
中央大学・経済学部・教授
研究者番号: 40256011

研究成果の概要：フランス語の最古の武勲詩『ローランの歌』は悲劇の舞台となったスペインにも伝わるが、この地では逆にローランを屠るベルナルドの伝説が形成されていく。この人物は中世を通じて親しまれ、肥大化し、とうとう国民的英雄にまでなって『ドン・キホーテ』になだれこむ。カロリング朝の伝説とアーサー王伝説が結合して、近代文学で新たな意味をおびる様を論じた。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2007 年度	600,000	180,000	780,000
2008 年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
年度			
総　計	1,200,000	360,000	1,560,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ文学（英文学を除く）
キーワード：：①外国文学　②比較文学

１．研究開始当初の背景
17 世紀『ドンキホーテ』の冒頭には、ローランを扼殺したベルナルドという架空の英雄が登場する。この伝説はどこで生まれ、どのように育まれたか？スペインではフランスの英雄はローランはどのように変貌したのか？

２．研究の目的
フランス語で書かれた最古の武勲詩『ローランの歌』は、非業の死を遂げる英雄ローランの主題が中世を通じて人気を博し、ヨーロッパ各国語でそれぞれのバージョンを育みながら成長する。しかし、スペインではそのローランを屠る全く新たな英雄の歌が創造される。そのモチーフはどこから来たのか、主題の変容はどういう経路をたどったのか、スペインのローラン伝説の全貌を明らかにしたい。

３．研究の方法
（1）スペインに残るローランの伝説を採取した。その範囲は年代記、俗謡、イコノグラフィー、民俗学まで可能な限り広げた。
（2）その反発から生まれたベルナルドという英雄の伝説について、年代記研究を行った。
（3）それらが『ドンキホーテ』の中でどのように結合し、新たな文学を形成するかを論じた。

４．研究成果

ロンスヴォーの谷は、フランスとスペインを隔てるピレネー山脈の奥深く、標高 952 メートルの難所である。スペイン語で「ロンセスバリェス」という。サンティアゴ巡礼街道のオスタバとパンプロナを結ぶ中間に位置し、古来、ありとあらゆる階層の人々がピレネーの南にそれぞれの夢を求めてこの峠を越えた。それは聖ヤコブの墓を目指す巡礼だけではなかった。羊飼い、職人、中には、コルドバで翻訳される東方の叡智、すなわち新しい数学と天文学の知識を求める学者、クリュニー修道会の聖職者もいた。イスラムの繁栄と栄華は、北方の民には脅威であると同時に神話でもあった。しかし、圧倒的に多かったのは軍人である。間近に迫る異教徒討伐にフランクの十二臣将はわれ先にこの関を越えた。この谷の名前を後世に伝える最も有名な事件は 778 年 8 月 15 日、シャルルマーニュのスペイン遠征からの帰途、殿軍を指揮するローランが、叔父のガヌロンの奸計に引っ掛かって、大敗を喫したロンスヴォーの戦いであろう。その間の様子は、12 世紀にチュロルドなるものによって『ローランの歌』という美しい叙事詩に描かれて今日に伝わる。角笛オリファンを吹くか吹くまいかと逡巡するローランは、激昂する余りに、吹いた途端に顳から血を流して非業の死を遂げる。この主題が中世を通じていかに人気を博したかは、ドイツ語では 1170 年頃にコンラートなるバイエルンの聖職者によって、オランダ語では 12 世紀末に、また 13 世紀になればノルウェーのハーコ 5 世のもとで翻訳され、各国語でその悲劇が繰り返し歌われることを見れば明らかであろう。

よって、ローランの名前がピレネーの南で人口に膾炙するようになるのも、決して遅い時期ではない。イスラム教徒からヨーロッパを死守したフランスの英雄は、全キリスト教世界の英雄としてイベリア半島でも蘇生する。12 世紀の末に、ようやく書き言葉としてのスペイン語が記録されるが、その最初の叙情詩、ゴンサロ・デ・ベルセオの『コゴリャの聖ミリャンの生涯』を見れば、「国王ラミロは、高潔な騎士にして、ローランやオリヴィエがかかってしても打ち負かせないほどで」と、「ローラン」や「オリヴィエ」という固有名詞が、既に確立した修辞のメタファーとして存在していている。

『ローランの歌』はピレネーを越え、サンティアゴ巡礼街道に沿って南下するうちに自己変節を遂げていくが、死の舞台、ロンスヴォーの彼方には、断末魔の苦しみを嘲笑うがごとき変容も待ちうけていた。いつ頃か、年代は特定できないが、このローランを屠る役目を受け持つベルナルド・デル・カルピオという人物が創造される。ローランの敵役のイスラム教徒が讃えられるのではない。そうではなくて、ローランを殺すのは同じキリスト教徒である。以下に紹介するこの途方もない物語が、一体、誰によって、どのような意図で作られたかは定かではない。しかしながら一度産声を上げたその小さな物語は中世からルネサンスにかけ、民間伝承によって育まれ、バラッドに歌われ、芝居にまでなり、17 世紀初頭、近代文学の幕開けとなる『ドン・キホーテ』の冒頭には、「それはこの騎士が、大地の子アンテウスを両腕でかかえて扼殺したというヘラクレスの故知にならい、ロンスヴォーで、魔法にかかったローランを殺めたから、というのであった。」（牛島信明訳）と、すっかり国民的英雄にまで変貌しきったベルナルドが登場する。そしてこの『ドン・キホーテ』続編には、ローランの剣デュランダルが騎士に変身をして、興味深い挿話を構成している。もはやローラン神話は解体していたのである。

スペインに「ローラン」の名を留める文献で、最も年代が遡るものは、いわゆる『サン・ミリャン注記』であろう。サン・ミリャン・デ・ラ・コゴリャ修道院で発見された。『注記』というのは、あたかも注釈のように欄外に書かれていたためで、同修道院の修道士の手によるものと考えられている。制作年代の上限は 1054 年、下限は 1076 年と推定されている。半世紀ほど前に、ダマソ・アロンソによって再発見され、オクスフォード本以前の文献証左として、学界は騒然となった。最古の写本であるオクスフォード版『ローランの歌』の制作年代が 1070 年から 1095 年であるから、『サン・ミリャン注記』はさらに一世代前に書かれた史料になる。

「816 年のこと、シャルル王はサラゴサに来た。その時彼は 12 人の甥を従えていた。それぞれが鎖かたびらに身を固めた三千人の騎士を従えていた。彼らの名前はローラン、ベルトラン、短剣のオじぇ、鼻の曲がったギヨーム、オリヴィエに司教のテュルパンであった。その 12 名が兵とともに、王に 1 年のうちの 1 月づつ仕えることになっていた。さて、王は親衛隊とともにサラゴサに留まった。しばらくして、家臣たちは王に貢を受け取るようにと進言した。これは兵を空腹で死なせないためであり、そして故国に帰すためであった。そして王は実行した。軍勢の撤退のために、勇敢な戦士ローランが殿を務め、王はこれをいたく喜んだ。軍がロンスヴォーのシセラの関を通ったとき、ローランはイスラムの兵に殺された。」

素朴な文体で『ローランの歌』の梗概を僅か 16 行の中にまとめている。この記述は史実を書きとめたものではなくて、遠くない時期に『ローランの歌』に流れ込む虚構の萌芽の羅列である。登場人物の創出、意味ありそ

うな帰国の理由、ローランがシャルルマーニュの甥になっていること、オリヴィエと司教テュルパンの名前が見えることなど、物語の作為性は明らかである。

1148 年頃のものと思われる『アルフォンソ帝年代記』の最終章には、ラテン語の頌詩『アルメリア征服記』が付随している。これは 1147 年のアルフォンソ 8 世のアルメリア征服を讃えたもので、作者は 1114 年に逝去した戦死アルバル・ファニェスの功績を思い出して、次のように歌っている。

「もしアルバルがローランの時代に生きていたら、彼はオリヴィエに次いで三番目に来るだろう。イスラムはフランスに屈したであろうし、最愛の仲間は屍を晒すこともなかった。かつて天が下にこれほどの槍使いはいなかった。」

1255 年ごろの『アビラ市入植年代記』にもローランの名前が見える。これは 1158 年頃の実在の騎士ソラキン・サンチョの勲功を記したものである。

「ソラキンは持っていた頭巾を槍の穂先にくくりつけ、突進した。そしてイスラム教徒をひとりずつ殺していった。囚われていた羊飼いたちは、互いに縄を解き、そして輪になって歌った。ローランは歌われ、オリヴィエは歌われる。しかしソラキンの歌はない。善き騎士であったのに。」

『ローランの歌』の最も印象的な場面は、自らの生命の絶えることを覚悟したローランが、名剣デュランダルが敵の手に渡ることを恐れ、岩にたたきつけて　剣の粉砕を試みる。「目前に暗灰色の岩あり。無念なり、心惜しとは思えど、その岩に十度斬りつける。鋼（はがね）はかっ！ときしりしも、折れもせず、刃こぼれもなし。」現在、ピレネー付近を散策すると、Roc de Roulan とか Piedra de Roldan などと呼ばれる数箇所切れ込みを入れた岩が、さながら道祖神のごとく、無数に見つかる。巨石が聳え立っているものもあれば、石ころに近いものまで、それぞれがデュランダルの傷跡を主張している。戦の舞台となったロンスヴォーのイバニェタ山頂に立てられているものが一番有名であるが、どれも千年の歴史とともに苔むしたり、風化したりで真贋はつけにくい。伝説や図像のほうが先にあって、それから岩に何か鋭利なもので切れ込みを作ったものだろうと推測するのは容易いが、流布、伝承を裏付ける文学的な、もしくは歴史的な資料は残っていない。

パンプロナで発見された『ロンスヴォーの歌』と呼ばれるわずか100行あまりの断片に、ローランの名前が残る。婦人の鞄に仕立てられていた二枚の羊皮紙は、ナバラ方言で書かれており、制作年代は諸説あるが、メネンデス・ピダルによれば 13 世紀初頭、ジュール・オランによれば 13 世紀末になる。

オリヴィエよ、語ってくれ、生来の家臣よ。
どこにローランを置き去りにしてきた。
お前たちを二人組にしてやったときに、私に誓ったではないか、
生涯、片時も離れ離れになるまいと。
オリヴィエよ、言ってくれ、どこに探しにいけばいいのだ。
（中略）
私が年端も行かぬ少年の頃、
わが祖国フランスの宝を探して歩き、
トレドに行って王ガラフレに仕えた。
王はこのデュランダルを手に入れていた。
私はブライマンテを殺した時イスラム教徒からこれを奪った。
甥よ、お前がお前の手から誰にも渡さないと誓ってくれたので、
私はそれをお前に渡したのだ。
その剣は私がイスラムから奪ったが、お前が戻してしまった。
神よ許し給え、お前はそれ以上は出来なかったのだ。
（省略）

これは『マイネーの歌』が下敷きになっていることは容易に推測ができる。シャルルマーニュの幼少期を歌ったものは、12、3 世紀までに西欧中に流布しており、ラテン語ほか、独仏伊語のものが知られているが、ジャック・オランによれば、失われたフランス語の『マイネーの歌』が源泉になったらしい。スペインにも伝わっているはずなのだが、詩文の形式では、現存せず、わずかにこの十行ほどが『ロンスヴォーの歌』に溶け込んでいるだけである。しかし、散文の形では、アルフォンソ賢王の『スペイン史』の中に、その梗概が残っている。「マイネーは、王国の相続をめぐる兄弟喧嘩に嫌気がさし、スペインに武者修行に出る。イスラム教トレドのガラフレ王に仕え、そして王の娘ガリアナ姫と恋に落ちる。巨人ブライモントとの一騎打ちに勝ち、名剣デュランダルを手に入れる。やがて父が亡くなると、マイネーはシャルルを名乗り、フランスに戻ってガリアナ姫を娶る。」

この名剣デュランダルのスペイン起源説を裏付けるかのように、アルフォンソ 11 世（在位 1312-50）の『狩の書』には、「モントントはバルアディエル・デル・ペセとヴィリャ・クリスト、そしてキンタニエラの間にあって、夏は熊の山として有名である。ビリャ・クリストの上流には選鉱池があって、この山の炭とアグアスビバス川の水で、ローランの剣デュランダルが鋳造された。」

ローランを殺すことになるベルナルドの名前が最初に現れるスペイン語の文献も『スペイン史』である。この中に「いくつかの叙事詩や伝説によれば」という源泉を示唆する記述があって、『ベルナルドの歌』という叙事詩が遅くとも 12 世紀の末には流布してい

たであろうと言われている。
「アルフォンソ童貞王の御世に、王の妹君であるドニャ・ヒメナはサルダニャ伯サン・ディアスと秘めやかな恋をされ、彼らはベルナルドという男子をもうけた。」
「またいくつかの叙事詩や物語では、このベルナルドはフランス王シャルルの妹君であらせらるるティンバル姫の子だという。姫がサンティアゴ・デ・コンポステラに巡礼に出かけた折、サンディアス伯が彼女を誘惑してサルダニャに連れて帰り、もうけた子である。」あろうことかベルナルドはシャルルマーニュの隠れた甥という設定である。シャルルマーニュの妹がサンティアゴに巡礼に行った事実はない。さて、主人公は不義密通によって誕生したが、シャルルマーニュの妹と言えば、ローランがシャルルマーニュと妹との近親相姦によって生まれたという『偽チュルパン年代記』に登場する伝説を思い出させる。妹君は、兄の子ばかりか、不義密通によって、その子を殺す子までを産むことになる。しかし、『偽テュルパン年代記』にはベルナルドは登場しないばかりか、後のロンスヴォーの戦いの描写が余りにも異なっている。
　怒ったアルフォンソ王は、伯を牢獄へ、妹を修道院へと入れ、男の子は自分が引き取って宮廷で育てることとなった。ベルナルドは読者の期待通り、成長すると勇敢な若者となる。アルフォンソ王は年齢を重ねてからというもの、ローマ皇帝にしてドイツならびにフランスの王であるシャルルに密かに使者を送り、自分には世継ぎもいないため、もしイスラム教徒に対する加勢をしてくれるなら王国を差上げてもよい旨を伝えた。大帝もまたイスラム教徒と戦っていた。
　当時フランスの南からピレネーの一帯にかけては、系統不明の、少なくともゲルマン民族ではないバスク人が住んでいた。ローマ帝国内部にあってゆっくりとキリスト教化してはいたが、その支配に対しては頑強に抵抗した。西ゴートはもとよりイスラムまでが、これには失敗した。フランク王国もこの難問に直面する。歴代の諸王は南下政策を取り続け、ことごとく山岳民族の抗戦に遭遇した。しかしピレネーの地中海側、すなわちプロヴァンスからカタロニアにかけては、事は順調に進み、この地に、バルセロナほか 10 余りの辺境伯を設置する。
　イスラム側ではアブド・アッ・ラフマーンのコルドバの後ウマイヤ朝が繁栄の極みに達している頃であるが、この王朝もスペインの全のアミールを掌握していたわけではなかった。特にサラゴサには、ダマスクスのアッバース朝に忠誠を誓う、アル・アラビーが残っていた。彼は、ウェストファーリアまでシャルルマーニュを訪ね、アブド・アッ・ラフマーンを牽制するために、フランク軍を派遣するよう要請している。そこでシャルルマーニュの一隊はカタルーニャ、ナバラを経てサラゴサまで来てみるが、ちょうど市内はコルドバのカリフの手に落ちたところで、やむなく隊はフランクへと戻る。その帰途、バスク人によって襲撃されたのが先に述べた 778 年のロンスヴォーの戦いである。『ローランの歌』が描いているようなイスラム教徒に対する聖戦ではない。偶発的な局地戦であったのだろう。
　オビエドの宮廷の貴族たちは一斉に反発する。中でもベルナルドは一番に反対した。王がシャルルの提案を取り下げると、シャルルの大帝は背信であるとこれに怒り、大群を率いてピレネー山脈を越える。
「ベルナルドはこれを聞いて激怒し、王の騎馬隊を率いてマルシルという名のイスラム教徒のもとに馳せ参じた。彼はサラゴサの王であって、ちょうどシャルルの大帝が戦っている相手であった。そこでシャルルの大帝はイスラム教徒と戦うのを止め、この僅かばかりのスペイン人を鎮圧するため兵を差し向けて来た。トゥイの僧正ルカによれば、トゥデラを包囲し、帝の臣将の一人であるガヌロンという名の伯の裏切りがなければ、そこを征服していたであろうという。」
　興味深いことは「ガヌロンの裏切り」という言葉が使われていることであろう。承知のように『ローランの歌』では、御前で恥をかかされたガヌロンがローランを亡き者にせむと、マルシルと内通し、ロンスヴォーの悲劇が起こる。
　ベルナルドはアストゥリアス軍に加えてサラゴサの異教の王マルシルに援軍を頼み、ロンスヴォーの谷へと急ぐ。
「アルフォンソ王は、先ほど申し上げた民を連れて、一方から馳せつけた。そうこうするうちにサラゴサの王マルシルが、イスラム教徒とナバラ人と、ありとあらゆる彼の家臣からなる大軍を率いてやってきた。そしてベルナルドが大帝目指してやってきて、そこに勢ぞろいした。ベルナルドは神の恐れを捨て、イスラム教徒とともにフランス人と戦った。アルフォンソ王もまた引き連れる家臣とともに戦場に入り、敵も味方も組んず解れつの乱闘となった。その戦さは凄絶で、双方で多くの兵が死んでいった。しかし、結局アルフォンソ王が、神のご加護により勝利した。トゥイの僧正ルカによれば、この戦いでローラン、アンセルモ伯、シャルルの執事であるジラール、その他フランスの身分の高い武将が死んだと言う。」
　残念ながら、『ローランの歌』に見るようなロンスヴォーの戦いの詳細な描写はない。オリヴィエの名前もテュルパン僧正の名もない。その余りの簡潔さは、むしろアインハルドの『カール大帝伝』の文体に極めて類似

しているとも言えよう。
「この時シャルルは大帝は、先ほど申し上げた谷の辺りにいた。そしてフランス兵が山を逃げ降りて来るのを見て、持っていた角笛を吹いた。逃げているものも、さ迷っているものも笛の音を聞いて集まってきた。ベルナルドやマルシル王を恐れて、後衛を守っているものも、彼のもとに終結した。ベルナルドは常に前衛にいてフランス軍を殲滅させたという。シャルルは自軍が壊滅し、あるものは戦死し、あるものは負傷し、敗走してちりじりばらばらになったが、いまだスペインの大軍が関を覆っているのを見て、失った家臣の痛みは承知の上で、捲土重来を期してゲルマニアに逃げ帰った。」
ベルナルドはこの時点で姿を消す。そして24年後、アルフォンソ大王がトレドのイスラム教徒を征圧するところから登場する。叙事詩、伝説によってはベルナルドはこの間、フランスにいたと述べている。この後半でベルナルドは躍動する。
続く比較的平穏な日々、ベルナルドは父の投獄の話を聞かされる。その時まで彼は自分は王の息子だと思っていた。彼は喪服を着て宮廷内を歩く。しかし、王はこれに怒り、サンチョ・ディアスを解放するのを拒否する。拒絶されると怒ったベルナルドは3人の貴族を連れて宮廷を去り、2年間王国を脅かす。多くの貴族が彼と同盟を結び、多くの土地を制圧してサラマンカの近くのカルピオというところに築城する。これが名前の由来となる。王はレオンに軍を結集させてベルナルドをカルピオ城に包囲する。再度、ベルナルドは父の解放を懇願するが、無駄であった。そこで軍を引き上げ、サラマンカを制圧し、アルフォンソ王をおびき出す。ベルナルドは、カルピオ城の鍵と父の交換を申し出る。しかし、サンチョ・ディアス伯は3日前、牢獄の中で死んでいた。
王は、伯の体を湯で洗って生きているようにみせかけ、着飾らせて、馬に乗せた。ベルナルド・デル・カルピオは近づいて父の手に接吻をするものの、それが既に冷たくなっていることに気づき、激しく泣いて城を後にする。優位に立った王はベルナルド・デル・カルピオにフランスに行くよう命ずる。王はベルナルドのことを非常に怒ってらっしゃったが、フランスに赴くための幾許かの金子と、付き従う騎士をお授けになった。
シャルル王のおわすパリに到着すると、宮廷に行き、王にひざまづいて口付けをし、アルフォンソ王とのこれまでの経緯を語った。フランス人は皆、同情し彼を歓迎した。ある叙事詩によれば、ベルナルドはその時、自分はシャルルマーニュの甥であり、ティンバル姫の子であると述べたと言われている。王は、これを聞いて非常に喜ばれ、偶々宮廷に居合わせたティンバル姫の子に、ベルナルドを兄として認めるかどうかお尋ねになった。彼はそれを否定した。ベルナルドは激怒し、王の面前で弟に決闘を申し込み、これに勝った。王は彼に金子と、馬と武具をお与えになった。
翌日ベルナルドはパリを発ち、行けば行くところを略奪した。アスパの関まで行って、ハカと呼ばれる谷を殖民した。彼が来たことで辺り一帯には恐怖が広がった。その頃、彼はイスラムとの戦いに三つ勝利し、多くの戦利品を獲得した。アインサからベルベガル、バルバストロサ、サベルネ、モンブランまでを平定した。その後、アラルドス・デ・ラトレ伯の娘でガリンダなる姫と結婚し、ガリン・ガリンデスという勇敢な男の子を残したと言われている。
これから三百年ほど歳月が流れ、1550年に出版された『バラッド集』には、デュランダルがいきなり騎士となって登場している。剣から騎士への変身である。しかもロンスヴォーで戦死する設定になっている。
「ああベレルマ、ぼくに意地悪するために生まれてきたのか、
いとこのモンテシノス、お願いがある、
ぼくが死んで、魂が昇天したら、
心臓をベレルマのもとに届けてくれ、
デュランダルは眠る、高い山のふもとに
遺体のそばでモンテシノスは泣いている。
頭から兜を脱がせ、腰の剣も外してやって、
小さな短剣で、彼を埋葬した。
彼は誓ったとおりに心臓をえぐりだした。
約束通り、ベレルマのものとに運ぶため。
カロリング朝の題材を扱ったバラッドは決して少なくない。「さあフランス軍はムーア人を攻撃する」、「アルベントサの野でベルトラン卿が殺された」、「オード姫の涙」など、どれもロンスヴォーの戦いを歌ったものである。いずれも史実を題材にしているが、この「ベレルマ」だけはすべて虚構であり、しかもデュランダルは騎士に変身している。しかも名前だけで活躍はなく、最初から断末魔の叫びを発している。いとこのモンテシノスも、ベレルマ姫も架空の人物である。誰が、いつ頃、創作したのかも何もわかっていない。心臓をえぐりだして、思い姫のもとに届けるという主題は『アマディス』にもあり、騎士道物語では珍しい話題ではなかったのだろう、他にもいくつか同じ内容のバラッドが存在する。
それから半世紀後、セルバンテスは『ドン・キホーテ続編』の中に、このロマンセを散文化して挿入している。いわゆる「モンテシノスの洞窟」の挿話である。
続編の第二十二章では、ドン・キホーテは、モンテシノスの洞窟へ入り、地下に壮麗な宮殿を目撃する挿話である。
『ドン・キホーテ』が書かれてから四百年

になるが、東西の批評家はこの話の本筋とは無縁の奇抜なエピソードについて何らかの意味を見出そうと、極めて熱心に論争を続けてきた。神秘主義の影響、ニコデモの福音書にある「キリストの地獄降り」、また、近年は、フロイト流の潜在意識、願望実現で解釈するのが大勢である。

私は、この挿話は騎士道物語、特にクレティアン・ド・トロワの『ペルスヴァル、あるいは聖杯の物語』のパロディだと考えている。言いかえれば、完全に理想化された彼の騎士道物語世界だとも言える。ドンキホーテ』は、当時はびこっていた騎士道物語を撲滅するために書かれ、そのため騎士道物語のスタイルをとって、騎士道物語を徹頭徹尾笑い飛ばす構造になっていることは今さら説明するまでもないだろう。

モンテシノスの洞窟の挿話は極めてよく似た様相を呈している。言うまでもなくドン・キホーテがペルスヴァルであり、モンテシノスは漁夫王の役割であろう。モンテシノスはシャルルマーニュの十二臣将の一人であるから騎士である。ところがモンテシノスは、若々しい戦士のいでたちではなく、地に届くほど長いマントをまとい、帽子に、白いあごひげの老人の姿で登場する。漁夫王も、白髪混じりの頭に黒豹の被りものを載せ、紫色の衣服をまとっていた。そして二人は話をする。モンテシノスは魔法にかけられて幽閉されているといい、漁夫王もまた同様に、肉体的にも困窮している姿で描かれる。そこに聖杯を捧げ持った乙女たちの行列が始まる。ドン・キホーテも、デュランダルの心臓を捧げ持ったベレルマの行列を見る。まったく同じ構図だと言ってもよかろう。登場人物、情況、すべてが相似形をなす。モンテシノスが、ドン・キホーテの来るのを待っていたように、漁夫王もペルスヴァルを待っていた。モンテシノスは、自分たちは魔法にかけられていて、その魔法を解けるのはドン・キホーテしかいない、と言って助けを求める。しかしドン・キホーテは返事をしない。同じようにペルスヴァルは、行列が通りすぎるのを目にしながら、あえて訊ねようとしない。それで、何か不都合が起こるのではあるまいか、そのために幸運が訪れるか、災難が落ちてくるか私にはわからない、とにかく何も訊ねないのだ。

まったく同じ舞台設定、つまり理想化された騎士道世界に主人公として入り込ませておいて、ここからセルバンテスは舞台を転覆させて、抱腹絶倒の渦を呼び込む。ベレルマが醜女であったことを導入に、現実世界を呼び込むのである。さらにそこにドゥルシネア･デル･トボソが、二人の侍女とともに現れ、白い木綿のスカートを担保に六レアル無心をする話を付け加える。しかも、ドン・キホーテは偶々持ち合わせがなく四レアルで我慢してもらった話も添えている。説明は不要であろう。前編から繰り返されてきた諧謔の世界が繰り返されているのである。笑いが成立するためには構図にずれが必要である。騎士道物語世界が理想化されていればいるほど、現実世界との乖離が笑いのレベルを深めるのである。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　１　件）
①福井千春、『わがシッドの歌』の作者をめぐって、査読有、中央大学論集、29、1-10頁、2008年

６．研究組織
(1)研究代表者
福井　千春　(FUKUI CHIHARU)
中央大学・経済学部・教授
研究者番号: 40256011

(2)研究分担者

(3)連携研究者